からである。

（ニーチェ，原佑訳『権力への意志』「世界の大思想」河出書房）

3 世界と存在そのものへ―現象学

▶ pp.124 ～ 128

現存在―ハイデガー

現存在は，たんにほかの存在者の間にならんで出現するにすぎない存在者ではない。それはむしろ，おのれの存在においてこの存在そのものに関わらされているということによって，存在的に殊別（しゅべつ）されているのである。してみれば，現存在の存在構成には，それがおのれの存在においてこの存在へむかって，ある存在関係をもっている，ということが属しているわけである。

（ハイデガー，細谷貞雄訳『存在と時間』上巻　ちくま学芸文庫）

死へとかかわる存在

死とは，現存在がいつもみずから引き受けなくてはならない存在可能性である。死においては，現存在自身がひとごとでない自己の存在可能において現存在に差し迫（せま）っているのである。この可能性においては，現存在は端的（たんてき）におのれの世界＝内＝存在そのものに関わらせられている。おのれの死とは，とりもなおさず，もはや現に存在しえなくなることの可能性である。現存在がこのようなおのれ自身の可能性として現存在に差し迫ってくるとき，現存在はひたすら，ひとごとでない自己の存在可能へ差し向けられている。……存在可能として，現存在は死の可能性を追い越すことができない。死は，現存在が絶対に不可能になることの可能性だからである。

（ハイデガー，細谷貞雄訳『存在と時間』下巻　ちくま学芸文庫）

実存が本質に先立つ ―サルトル

人間は，みずからつくるところのもの以外の何ものでもない。以上が実存主義の第一原理なのである。これがまたいわゆる主体性であり，まさしくそのような名で世人がわれわれに非難しているものなのである。しかしわれわれがそれによって意味するのは，人間は石ころや机よりも尊厳であるということ以外にはない。というのは，われわれは人間がまず先に実存するものだということ，すなわち人間はまず，未来にむかってみずからを投げるものであり，未来のなかにみずからを投企（とうき）することを意識するものであることをいおうとするのだからである。

（サルトル，伊吹武彦訳『実存主義とは何か』人文書院）

フェミニズム ―ボーヴォワール

人は女に生れない。女になるのだ。人間の雌（めす）が社会のなかでとっている形態は，どんな生理的・心理的・経済的宿命がこれを定めているのでもけっしてない。文明の全体が雄（おす）と去勢（きょせい）体との中間産物をつくりあげ，それに女性という名をつけているだけのことである。

（ボーヴォワール，生島遼一訳『第二の性』『ボーヴォワール著作集』６巻　人文書院）

〈他者〉の顔 ―レヴィナス

〈他者〉が位置するのはどのような意味でも最上級の権力ではなく，まさに〈他者〉の超越という無限なものである。この無限なものは殺人よりも強いのであって，〈他者〉の顔としてすでに私たちに抵抗している。この無限なものが〈他者〉の顔であり本源的な表出であって，「あなたは殺してはならない」という最初のことばなのである。無限なものは殺人に対する無限な抵抗によって権能を麻痺（まひ）させる，この抵抗は堅固（けんご）で乗り越えがたいものとして，他者の顔のうちで，無防備なその目のまったき裸形のうちで煌（きら）めく。……そこにあるものは，きわめて大きな抵抗との関係ではなく，